第32回全国高等学校選抜ボート大会
女子舵手付クォドルプル 12位

佐沼高 ボート部

「全国への挑戦と今後への経験」

「第32回全国高等学校選抜ボート大会」は3月25、26の両日、浜松市天竜ボート場で開かれ、佐沼高ボート部が女子舵手付クォドルプルの部に東北代表として出場した。

昨年10月の東北選抜大会で優勝し、本大会への出場を決めていた佐沼高。1000㍍のレースだった東北大会に対し、毎年選抜大会が開かれる浜松市天竜ボート場は倍の2000㍍で競われる。東北大会終了後から長距離に対応するため、オールを漕ぐペースの変更や体力づくりに精を出した。

全国大会は、新型コロナ拡大防止のため開催自体が危ぶまれたものの、3月上旬に無観客での開催が決定。しかし、大会直前の3月21日、東海から東北に掛けて降った大雨の影響で、天竜ボート場のコース設備が被災。大会本部は短期間での復旧作業に追われた。レースができる程度に復旧はしたものの、3日間を予定していた大会日程を2日間に短縮し、試合前に予定されていた公式練習は中止に。レース距離も、2000㍍から1000㍍へ変更された。

「秋から練習してきた長い距離でレースができなくなり不安はあったが、全てのチームが同じ状況。早く気持ちを切り替えて、自分たちにとってはプラスと考えるようにした」と話す主将の上野有里。

大会前日に視察に会場を訪れた佐沼高は、違和感を感じた。コースを6レーンに分け、レース中の目印になるはずのブイの間隔が広い。長沼ボート場は10㍍置きに、天竜ボート場も通常は25㍍置きに設置されていたブイが、大雨の影響で250㍍間隔でしか設置されていなかった。

「コースに対して真っすぐ進めているかが分かりづらく、舵の操作がいつもよりも難しかった」と、舵取り役であるコックスの冨士原玲那が振り返る通り、大会中は、コースアウトする艇が続出。審判艇からは何度も警告音が鳴り響いた。

そんな中、レースに向けて準備を始めた佐沼高。自分の体のサイズに合わせ、艇に金具を取り付ける「リギング」の作業に手こずり、他校の艇より遅れて出航する。その分予定していたアップの時間が足りなくなり、体が温まっていない中でレーススタートを迎えた。

「緊張と焦りが出てしまった」と上野が話す通り、予選レースが始まるもクルーの動きが合わず、艇のバランスが取れない。他より遅れをとったまま500㍍を過ぎたとき、審判艇の警告音が鳴り、レース中断を告げる赤旗が上がった。1レーンを走っていた他校の艇が隣の艇に接触。レースは約1時間後に再スタートすることとなった。

相次ぐトラブルも、アップが足りていなかった佐沼高にとっては追い風に。再レースは、先ほどのレースとは打って変わって好調な滑り出しを見せる佐沼高。全国の強豪相手に500㍍付近まで競った展開を見せる。後半ペースを上げた強豪校に徐々に離されるも、最後まで自分たちのペースを貫き、グループ3位に食い込む。決勝は逃したものの、翌日の順位決定戦へと駒を進めた。

翌日は、一番端6レーンでのレース。軽快なスタートを切り、順調に走っていたものの、なぜか周りの艇から少しずつ離されていく。一番端のレーンだった佐沼高だが、気付くと更に一つ外のレーンを走っていた。途中で気付いた冨士原が修正を試みるも、コースを大回りしてしまった佐沼高の艇は6番目でゴールラインを通過した。

顧問の井上裕市先生は「初めて出た全国の舞台で堂々としたレースだった。冬場になかなか練習ができない東北のチームとして、選抜で順位決定戦に残ったのは立派」と選手たちをねぎらうと、「親の会からの手厚いバックアップや練習施設のスタッフなど多くの人に支えられていると感じている。佐沼は、男子も良い感じに仕上がってきてるので、夏は男女での全国大会出場を目指し、結果で感謝を伝えられれば」と次の大会への目標を続けた。

上野は「インターハイへの出場が今の目標」と決意を新たにする。

夏の宮城県予選の舞台は長沼ボート場。地元の声援を背に、再び全国の舞台へ駆け上がる。